
Elfing

中さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Elfing

【Nコード】

N0493BA

【作者名】

中さん

【あらすじ】

ここは妖精と人間が契約を交わして共存する世界、“人間界”。これはそんな世界に生まれた少女のサファイアが様々な問題乗り越え、成長していくファンタジーな物語です。

始まりの理

ここは、

妖精と人間が共存する世界。

太古の昔から妖精と人間は互いの知恵を出しあい信頼し、共に歩んできた。

しかし時代・トキ・が経つにつれ、妖精の特別な力を利用し、人間同士が闘うようになった。

それはやがて世界をも巻き込む大きな戦争へと発展した。

彼らは私利私欲のため、
思うがままに妖精の力を使った。

かつての平穏な日常は、
妖精との信頼関係と共に消え、
栄えた文明は地へ堕ちていった。

そんなある時、

1人の若者と1人の妖精が世界に現れた。

2人は協力し合い、妖精だけが暮らせる”妖精界”と人間が暮らす”人間界”を創り世界を二分した。

また、

妖精はふたつの世界を繋ぐ門

(”CONNECT GATE>コネクト ゲート<”)を創り、

”人間界”に行ける妖精の数を制限した。

人間は闘いを止めない者たちに

公式競技（”elfing>エルフィンゲ<”）を与えた。

それは、一対一で人間と契約を結んだ妖精が、人間の代わりに闘うものだった。

競技ができてから、闘いの数は段々減っていき、現在では以前の様な平穏な日常が戻ってきた。

”妖精界”で暮らす妖精を

”民精>ミンセイ<”

人間と契約を結び、パートナーとなった妖精を”主精>シュセイ<”、

主精と人間の力で創られる妖精を”創精>ソウセイ<”と言う。

そして、妖精と人間が契約を結ぶ事を”霊合>タマアイ<”と言う。

世界を救った妖精は”妖精界”で

”精王>セイオオ<”と呼ばれ、

人間は”人間界”で

”HEROIC>ハーロツク<”（英雄）と呼ばれた。

二者はその命が尽きるまで、平和になった世界を静かに見守った。

その後、”精王”と”HEROIC”は、後の代へと受け継がれる役職となった。

始まりの理（後書き）

” e l f i n g ” は凝った内容なので、説明が長い部分がありますが、楽しんで頂ければ嬉しいです。

私自身まだまだ未熟ですので、誤字脱字や間違った日本語を使っているかもしれません。間違いを発見した場合は、教えてください。

また感想も求むです。

週一投稿を目指して頑張りますので、これからよろしくお願いします
す m (—) m

第1話：ロバート学園

AM 8時10分

「行くよ、ナディー、アイビー！」

小さな女の子のサファイアが、家の中に声を掛けると、家の中から主精ナディーと創精アイビーが飛んで出てきた。

「ビー！」

アイビーは、嬉しそうにサファイアの肩に飛び乗った。

ナディーはサファイアの隣に舞い降りた。

「じゃあ、しゅっぱーっ！」

元気よく走り出したのは、
主精のナディーと
創精のアイビーのパートナーの
サファイア。

サファイアはロバート学園（通称：elf学園）に通う初等部3年。

ロバート学園（通称：elf学園）は、創立160年で、創設者ハ
イデ・ランベル・ロバートの意向で妖精の教育を行う、世界でt
o
pクラスの学園だ。

入学から3年間で”初等部”、

次の年からを”中等部”、
更には”高等部”と言う。

「次の年から」と説明が曖昧なのは、ロバート学園では義務教育を行うのは初等までで、
中等からは現実の高等学校とかわらず、義務教育を外れる。

そのため、進級に必要なレベルがない者には留年制度があり、
勉学に向上心のない者には
強制退学もあり得るのだ。

通常、中等も高等も留年しなければ3年で卒業できる。

だが、初等、中等、中等、高等に進学時には、難易度の高い進級テストが待ち受けている。

そんなロバート学園には、
毎年冬の季節になると、

およそ1000人の入学希望者が世界中から集まり、盛大な入学試験が行われる。

そして選ばれた300人のみが入学できるのだ。

その中でもサファイアは、学年topで入学した、才ある者だった。

しかしその才は、学年を重ねる毎に下落してゆき、今では中の下。

元々周囲からは嫌われていたのが更に拍車がかかり、今では口を聞く者は誰一人としていない。

だがそんな事、サファイアはちっとも気にしていなかった。

サファイアは、側にナディーとアイビーが居れば、それだけで幸せなだった。

教室の前まで行くと、

急にサファイアの足取りが重くなった。

「どうしました、サファイア？」

ナディーはその異変に気づいた。

「ううん、何でもない」

首を横に振り、大きく深呼吸をして、ドアの取手に手を掛けた。

>ガラガラ…<

ドアを開け、教室に入った。

すると、話し声で騒がしかった教室は一気に静かになった。

そして、まるで異物でも見るかのような酷い視線が注がれた。

何時もの事だ。

「おはよう」

サファイアは気にせず挨拶をした。

だが、当然返事は返ってこない。

沈黙の中、席についた。

すると何処からか、1人の男子生徒が心のない言葉を発した。

「また来たよ…」

それに乗じて、色んな所からそれと同様な、いやそれ以上の言葉が飛んできた。

「ほんと、

辞めちゃえばいいのに…」

「来てる意味あるの？」

「落ちこぼれのくせに…」

サファイアはそんな言葉に動じず、堂々と静かに座っていた。

「失礼ではありませんか!？」

耐えきれず、ナディーがサファイアを守るように前に立った。

「ビー!」

アイビーも威嚇している。

主精のナディーが出てくると、他の生徒の主精も黙ってはいなかった。

前に出て、ナディーとのにらみ合いが始まった。

「ナディー、やめて」

止めたのは、サファイアだった。

「しかし…」

納得がいかないナディーはやめなかった。

「ナディー、やめて」

サファイアは繰り返した。

「お願い。」

私は大丈夫だから。……ね？」

サファイアは微笑んだ。

ナディーは拳をこらえ、
パートナーであるサファイアの願いに従った。

「…はい」

ナディーが下がると、他の生徒の主精も下がった。

霊合をして人間と契約を交わした妖精は、パートナーの命に従わなければならない。

だがナディーは、サファイアから命令を受けたとは思っていない。
又、サファイアも命令をしたとは思っていない。

サファイアの願いに従っている。

それが2人の望んだ人間と妖精の在り方なのだ。

一方、主精が下がっても他の生徒は下がらなかった。

「主精に守られてやんの…」

「ダッセー」

非難の声は更にパワーアップした。

「はい、おしまい！」

もうすぐ鐘鳴るから、
席についてくださいね」

その空気を変えたのは、

学級委員長の

海野 うみの 継 きずな だった。

継は手をパンパンと叩いて、
皆とサファイアの間、
笑顔で入ってきた。

>ゴーンゴーンゴーン…<

授業の始まりの鐘が鳴り、生徒たちは次々席についた。

「？」

その時、自分の事を見ている継の視線に気づいた。

継はサファイアに笑顔を見せて、自分の席についた。

第1話：ロバート学園（後書き）

> 紹介 <

主人公：サファイア・エキュレート

10歳 / 女の子 / 青色の瞳 / 茶の単髪

主精：ナディー

人型の妖精 / 桃色の瞳 / 桃色の長髪

創精：アイビー

動物型の妖精 / 兎 / 額に青色の宝石

第2話：コントロール

授業の始まりの鐘が鳴り、担任の教師が入ってきた。

「おはよう、皆さん」

「おはようございます、先生」

生徒たちは、声を合わせて挨拶を返した。

「起立…礼！」

学級委員長の継の授業始まりの挨拶で、授業は始まった。

「皆さんは学園に入学して

既に3年…中等部への進級テストは1年後です。

主精とは、より強い絆が結ばれていることでしょう。

今日から妖精との力、

”妖力>よりりよくく”を皆さんに、教えようと思います」

「先生。

俺、妖力なんて持ってませーん」

男子生徒が手を挙げて発言した。

「いいえ。

妖精と霊合を交わした時点で、

私たち人間には新しい力…妖力が宿ります。使ってないだけで、

皆さんの中にあります」

教師は鞆の中から掌サイズの小石を取り出した。

「クイル」

教師の主精、クイルが教師の側に寄った。

そして、妖力を見せた。

小石は教師の掌から

スツと浮いた。

「おおー！」

生徒たちは感心した。

「これを皆さんにやってもらいます」

教師は石を教卓に戻した。

「これは妖精と力を合わせ

安定した妖力を作り、皆さんが

その力をコントロールして初めて使える技です。

”elfing”をするにあたって、

初歩中の初歩であって、最も重要な一歩なのです」

「先生、妖力は簡単に身に付く事ができるんですか？」

今度は女子生徒が手を挙げて、質問した。

「コントロールが得意でない人はこれは困難な技でしょう。」

ですが、全ては繋がり…絆です。

妖精との絆が浅ければ浅いほど、時間はかかります。」

教師は丁寧に説明した。

「そのコントロールはe l f i n gのどのような時に役立つんですか？」

継が手を挙げ、質問した。

「コントロールは、e l f i n gの試合中は何の抗力も発揮できません。」

しかし、コントロールできるようになる事で妖力が向上すると、人間のバロメーターが上がります。

その事により妖精の使用できる技が増し、より闘いが容易になるでしょう。

まあ、個人差はありますが…
これを卒業するまでの2年間で
習得しましょう」

はいっ

生徒たちはやる気満々だった。

「それでは、中庭から掌サイズの石をひとつ拾ってきてください。
10分後、教室に集合です」

教師がそう言うと、生徒たちは一斉に立ち上がり、教室から出ていった。

サファイアも立ち上がり、教室から出ようとした時だった。

「あ、サファイア！」

教師は席を立ったサファイアを
呼び止めた。

「…何ですか？」

サファイアは足を止め、教室に入った。

「もしかすると、
妖力がコントロールできたら、
その創精も人間の言葉を発する事が可能になるかもしれませんよ」

サファイアは、足元を跳び跳ねるアイビーを見た。

「ビー？」

アイビーは自分の話をされていることに気付き、サファイアの顔を見た。

「…そうですか。話せるように、なればいいんですけど」

サファイアはアイビーを抱き抱えた。

「それでは、石を取ってきます」

そう言うとサファイアは、教室から出ていった。

教室には教師独り残った。

サファイアは廊下に出て、しばらく歩いたところで止まった。

「アイビーが言葉を話す…か。
想像したことないよ」

サファイアはナディーを見た。

「…そうですね」

「先生は期待しているみたいだけど…私に、できるかな？」

「きっとサファイアなら、
できますよ」

優しいナディーの声が、
不安でいっぱいサファイアの心に安心感を与えた。

「ビー！」

アイビーも応援してくれている。

「…ん、やってみるよ」

そうして、サファイアは走って中庭に向かった。

ナディーはサファイアの後について行った。

ところでサファイアは、

特別”elfing”がしくてロバート学園に入学した訳じゃない。

ロバート学園は入学試験でtopになれば、授業料・入学金免除で入学できるの唯一の学園だった。

それは、両親がいないサファイアにとって、とても有難い制度だったのだ。

第2話：コントロール（後書き）

> 紹介 <

クラスメイト：

うみの
海野 継きすな

カールがかった金髪／赤いリボンのツインテール／学級委員長

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0493ba/>

Elfing

2012年1月9日01時49分発行